

山口県周東町埋蔵文化財調査報告第1集

山口県周東町

河^{かわ}池^{いけ}遺跡

1982

周東町教育委員会

発刊のことば

周東町史編さん作業の後期に河池に埋蔵土器が多出したので急ぎ専門家の発掘調査をお願いし、町史の先・原史時代の編年史に貴重な資料を添えることができたのは極めて有意義でありました。

この報告書は、当時調査をご担当いただいた日本考古学協会員、中野・前田両先生が学術的に考証し、執筆編集されたものであります。町教育委員会としては、この種報告書の刊行は初の企画であります。この書により古代人の生活用具を知り、その創造性、芸術性そして生きるたくましさにふれ、さらに文化財に対する認識と理解を深めるための資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この調査にあたりご協力をいただいた両先生、土地所有者並びに地元関係各位に対し深く感謝の意を表する次第であります。

昭和57年3月

周東町教育委員会

教育長 国 政 清 士

例 言

1. 本書は、山口県周東町教育委員会が昭和53年1月に緊急発掘した河池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は防府市立佐波中学校教諭・中野一人（現桑山中学校）と同教諭・前田耕次（現山口県教委文化課、旧姓辻田）が担当した。なお、現地では町職員のほか市原伊男・手嶋靖規・鳥辺芳一・野嶋久雄の各氏が調査に協力した。
3. 本書の執筆は中野・前田が分担し、編集は前田が担当した。
4. 第2図使用の周辺地形の測量は、周東町役場施設課・手嶋正勝氏の協力を得、製図は前田があたった。
5. 本書に掲載した地図（第1図）は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1の地形図を複製したものである。（承認番号）昭和57年国地中複第105号。

本文目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 発見された袋状貯蔵穴	3
IV. 出土した弥生土器	4
V. 河池遺跡出土の弥生土器	8
VI. ま と め	9

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 遺跡地周辺の地形図	2
第3図 袋状貯蔵穴実測図	3
第4図 下層出土の弥生土器実測図	5
第5図 下層出土の弥生土器拓影	6
第6図 上層出土の弥生土器実測図	7
第7図 防府市井上山遺跡出土の弥生土器	9

図 版 目 次

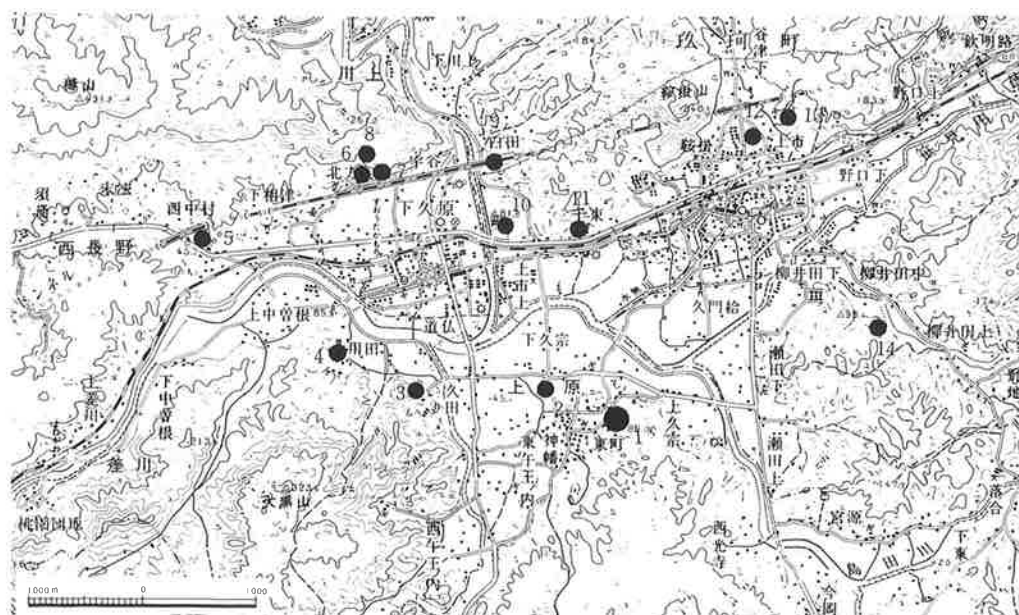
図版 I 遺跡の遠景・近景・調査前の状況
図版 II 弥生土器出土状況と袋状貯蔵穴
図版 III 下層出土の弥生土器
図版 IV 上層出土の弥生土器

I. 調査に至る経緯

本遺跡は、昭和53年1月、周東町大字上久原字河池で、北西に派生する低い丘陵端を私道拡幅（林道）のため切り崩したところ、土器が多数出土したことから発見されたものである。1月12日、同町中久宗在住の中原博氏から土器発見の知らせを受けた町教育委員会は、県教育委員会文化課へ遺跡の確認を依頼した。翌13日、県文化課の中村徹也埋蔵文化財係長が現地調査をしたところ、土器を多数包蔵する弥生時代中期頃の貯蔵穴であることが判明し、さらに同じ崖面にも他に2ヶ所の貯蔵穴が確認された。また、谷をへだてた南側の丘陵の畑地の崖面にも弥生土器を含む住居跡状の遺物包含層もあらたに確認されたことから、この丘陵地一帯は弥生時代の集落跡の可能性が強いことが予測された。町教育委員会は、遺跡地は当面壊されることはないが、多数の土器が露出していること、町史編纂事業の一環として古代編追加の資料としたい意向などから、小規模な緊急発掘をすることにした。

町教育委員会は、中野・前田に発掘調査を依頼し、同年1月28・29日の2日間にわたり土器の出土した貯蔵穴の調査を実施した。

出土した土器類は復元し、周東町中央公民館に保管されている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 河池遺跡
2. 陳ヶ原遺跡
3. 久田遺跡
4. 用田遺跡
5. 中村遺跡
6. 北方古墳
7. 大元古墳
8. 大浴遺跡
9. 白田遺跡
10. 筏山古墳
11. 千束遺跡
12. 千人塚
13. 大伴遺跡
14. 柳井田遺跡

II. 遺跡の位置と環境

河池遺跡は行政上、山口県玖珂郡周東町大字久原字河池に所在する弥生時代中期の遺跡である。玖西地域は盆地で、南縁部に烏田川の上流が流れ、その左岸の低い山脚部に河池遺跡は立地し、標高約80m、水田からの比高はおよそ3mである。

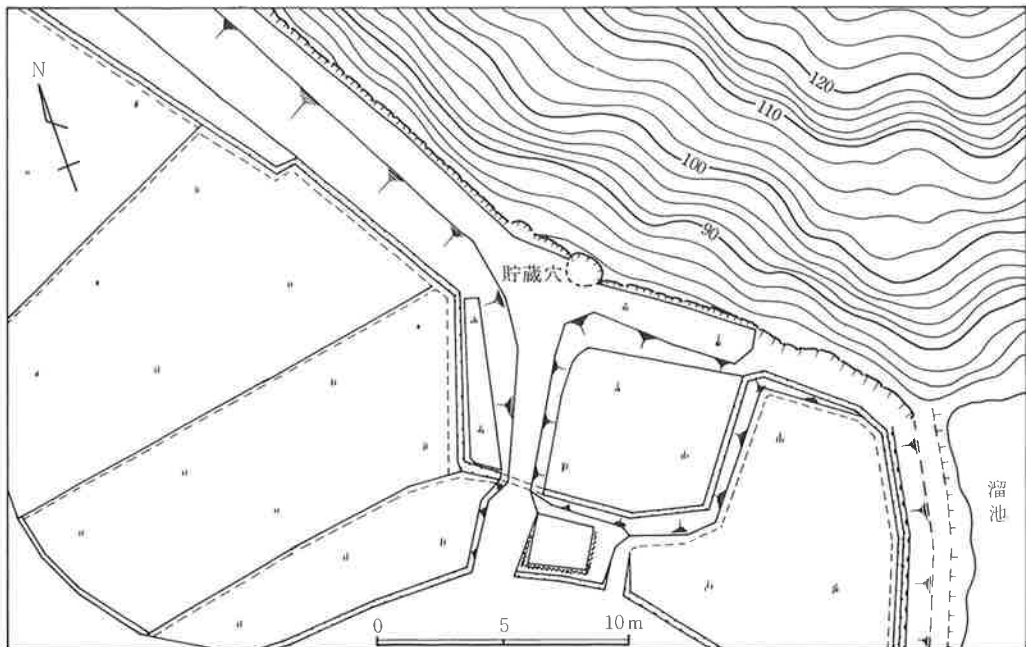
周辺の遺跡をみると、河池遺跡の西には用田遺跡がある。久行富士之助氏などによりかなり古くから遺物が発見されている。押型文をはじめ縄文時代すべてにまたがる土器片が出土し、石鏃や石斧などとともに漁撈に使用された石錘も2個みつまっている。さらに右岸の西長野や原畑・北方・白田などから縄文土器や石器が採集されている。

弥生時代の遺跡としてすぐ西側の中久宗から前期の甕が発見されている。東川のほとりの高森高校敷地には筏山遺跡があり、弥生期の住居跡と竪穴式石室墳、さらに経塚と三時代の重複した遺跡として著明である。また、小川部落の背後の丘陵には、短期間の居住地と考えられる小さな竪穴住居跡があり、その西には壺棺を埋葬した遺跡がある。なお、対岸の用田にも合口壺棺が出土し、この中から乳臼歯が検出されている。

古墳期の遺跡として、原畑では床面積14m²ばかりの隅丸方形の住居跡がみつまっている。墳墓には前述の筏山古墳について後期の横穴式石室墳として北方古墳がある。多くの須恵器や武器・利器・馬具などが出土している。さらに東の尾根には大元古墳があり、対岸には用田古墳が残存しており、多くの須恵器が山口県立山口博物館に保管されている。

参考文献

山口県教育委員会 「山口県遺跡地図」 1972 周東町町史編纂委員会 「周東町史」 1979



第2図 遺跡地周辺の地形図

III. 発見された袋状貯蔵穴

この貯蔵穴は、私道（林道）建設の際、西側の半分近くを削り取られていたが、残存部分から規模・形態を明らかにすることができる。花崗岩のバイ乱した地山を掘り込んだ貯蔵穴は、口径130×149cm、深さ133cm、床面径130cmである。壁面はほぼ垂直に掘り込まれているが、特に北西側はいわゆる袋状をなし、袋状部の最大径は153cmを測る。床面はほぼ平坦である。

貯蔵穴内の堆積土は黄褐色土（第Ⅲ層）、淡黄褐色土（第Ⅳ層）、バイ乱土混りの褐色土（第Ⅴ層）の3層に分かれ、第Ⅳ層以外は多量の土器片を包蔵していた（第3図 図版Ⅰ・Ⅱ）。

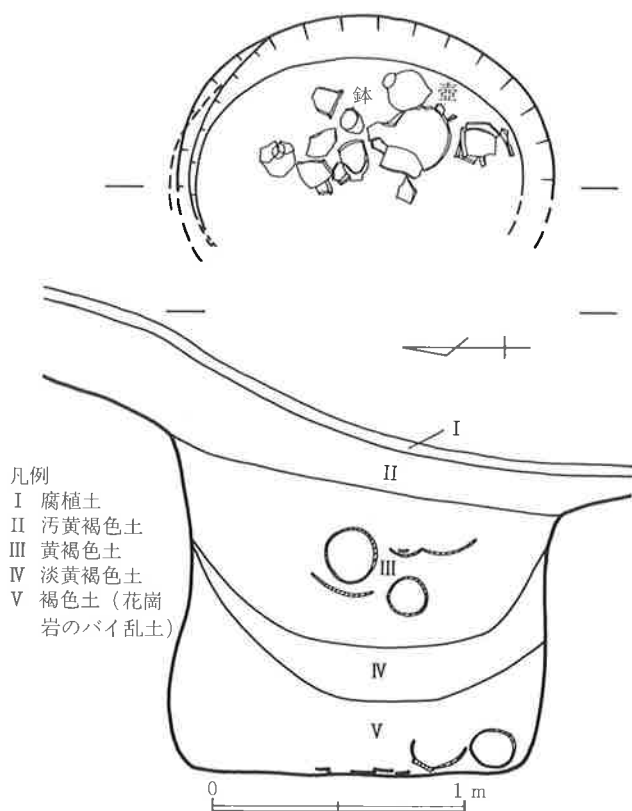
遺物は第Ⅲ～第Ⅳ層（上層の土器と呼ぶ）にかけてと、第Ⅴ層の下位および床面（下層の土器と呼ぶ）から数多く出土した。上層の土器は貯蔵穴の中央部に重なった状態で出土し、復元可能な破片が多いことから、第Ⅲ層が堆積する段階で投棄された可能性が強いものである。下層の土器も上位の方は投棄された様相を示すが、床面出土の土器は完形品や押しつぶされた状況のものが多いことから、据えられていたようである。いずれも床中央から東側壁面下に集中している。

植物遺体としては、ドングリやシイの種子が床面上から出土している。

石器類の出土は皆無である。

なお、この貯蔵穴から林道に沿って約5m北側の崖面にも、ほぼ同一様式の弥生土器片を含む長さ100cm、深さ50cm程度の貯蔵穴らしき遺構が露呈している。今回の調査ではこの遺構にはふれず、現地保存している。

また、この貯蔵穴の上位の丘陵斜面にも弥生土器片が散在していることから、この丘陵全体に多くの遺構が埋存している可能性が強い。



第3図 袋状貯蔵穴実測図

IV. 出土した弥生土器

1. 下層出土の弥生土器 (第4図・第5図 図版Ⅲ)

壺形土器

口縁部は欠損しているが、頸部に断面三角形の突帯をめぐらし、肩部に楕円形の文様をつけた土器が3個体発見されている(第4図1・2・3 第5図拓影)。1は茶褐色を呈し、肩部付近は斜め方向に極めて細かい刷毛で調整したのち、楕円形で三段の沈線文とその間に波状文を施文している。肩部付近は朱塗されている。下半分はかなり剥落し、胎土にはかなり石粒を含んでいるが、焼成はきわめて良く、微密である。内面は粗い刷毛で調整され、黒色を呈している。2は3段の波状文をめぐらし、その下位に刺突文をつけている。肩部は斜め方向の刷毛目が見られ、下半部は横方向に磨研している。3は沈線文と波状文を交互につけているが、脆質で施文も粗雑であり、拓本をとっても楕円形が鮮明に表現できない。また、かなり大型の壺形土器の破片で、肩部に半截竹管状のもので施文したと思われる2条の沈線で斜格子を中心とした文様をつけ、その下位に大きな円形貼付文をつけたものがある。器壁は厚く、外壁はなめらかに磨研して文様をつけ、内壁には指頭で押さえぎみにならした痕がある(第5図 図版Ⅳ)。

11と12は小型のわりには器壁が厚く、粗製の壺形土器で、内壁には輪積みの痕を残し、肩部付近には指頭かヘラでえぐった痕が確認できる。外壁はかるくならし、11は下半分を大きく削り取っている。

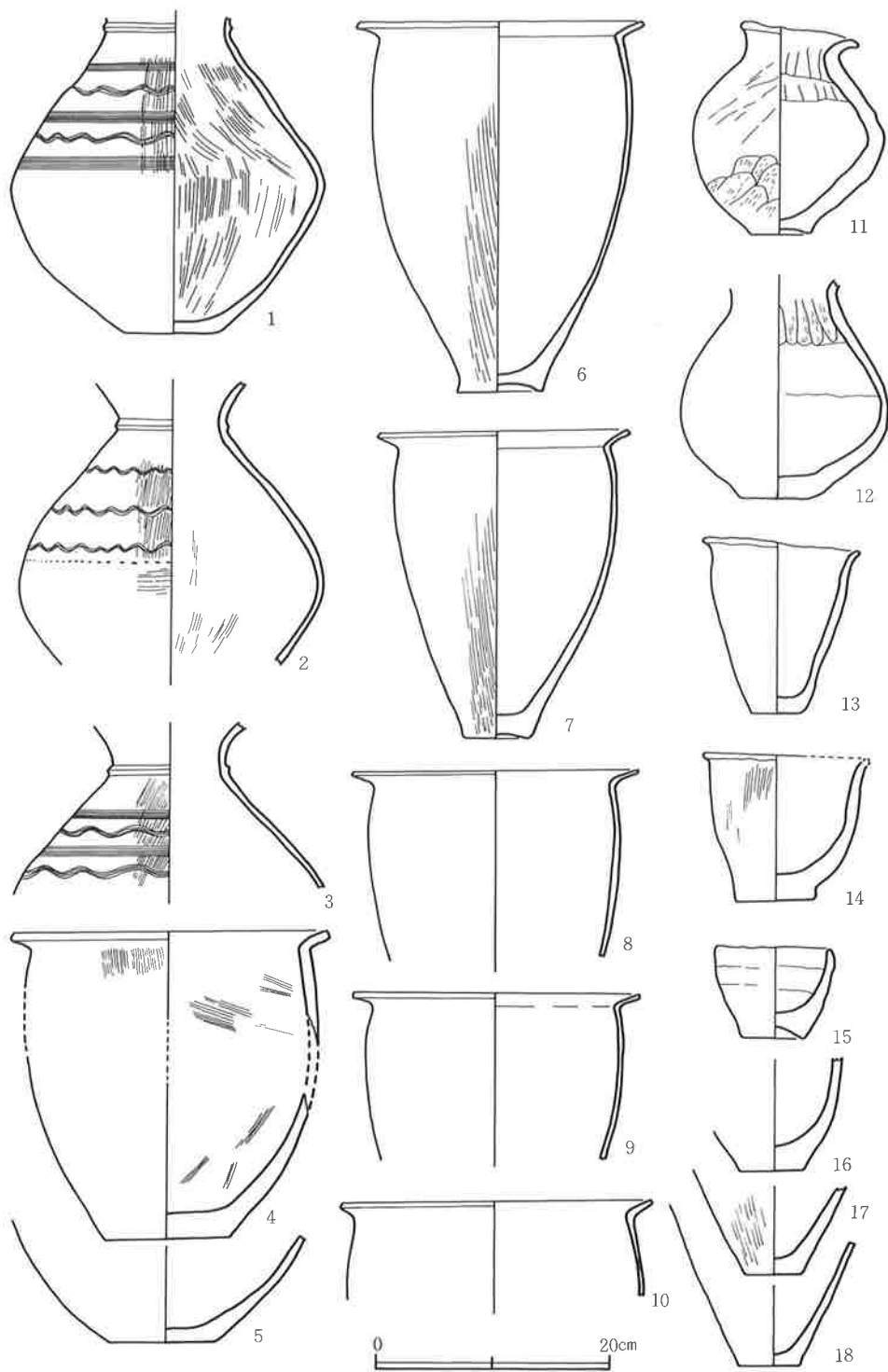
甕形土器

4は腹部の一部が欠損しており、図上復原したものであるが、底部の面積も広く整形手法も他の甕とちがいで、煤の付着もみられないところから、深鉢として分類できるかもしれない。器壁も厚く、外壁の口縁の下位には粗い刷毛目縦方向につけられ、下半部はなめらかにならしている。内壁は部分的に櫛目状のかたい刷毛目を残し、下半部を中心になめらかに調整している。6と7はいずれも茶褐色を呈し、外壁の下半分は縦方向に押しぎみに磨研しており、上半分には煤が付着している。内壁には磨研痕は認められないが、なめらかにならしている。8～10は甕形土器の破片であるが、6や7と同様な手法でつくられている。新陳代謝のはげしい煮沸用具としての甕形土器は、たいてい刷毛でおおまかに調整されていることが多いが、この遺跡の甕形土器は上・下層とも器壁が薄く、ヘラ磨研などで内外面ともきれいに調整され、ていねいに作られているところに特色がある。

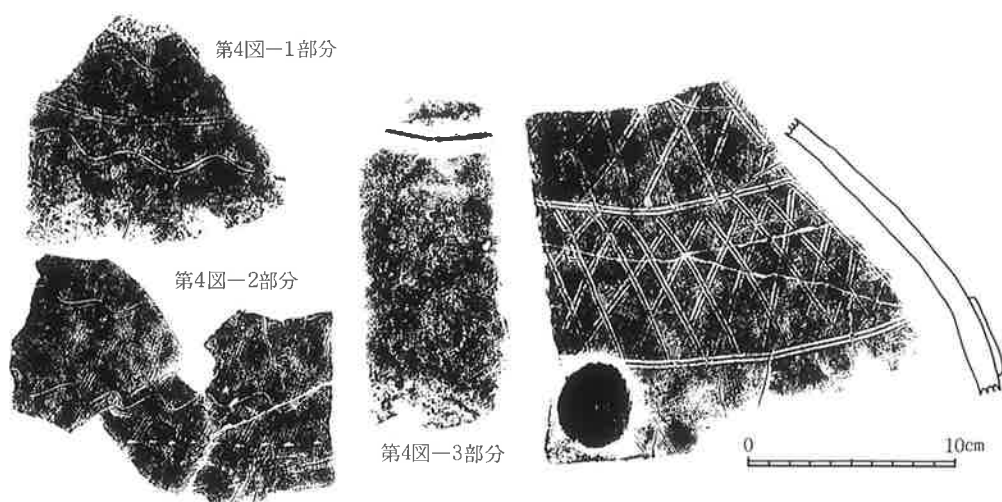
鉢形土器

小型で粗製の鉢が3個ある。15は口縁が内彎ぎみの直口を示し、底部はあげ底で器壁の内外に輪積みの痕を残している。13は深鉢で暗褐色を呈し、焼成も悪く脆質でこまかく破れていた。14は口縁の下に縦方向の調整痕がみられる。器壁はかなり厚く、外壁は剥落している。

このほか甕形土器の底部と思われるもの(16～18)や、壺形土器の底部(5)とがある。



第4図 下層出土の弥生土器実測図



第5図 下層出土の弥生土器拓影

2. 上層の弥生土器 (第6図 図版Ⅳ)

壺形土器

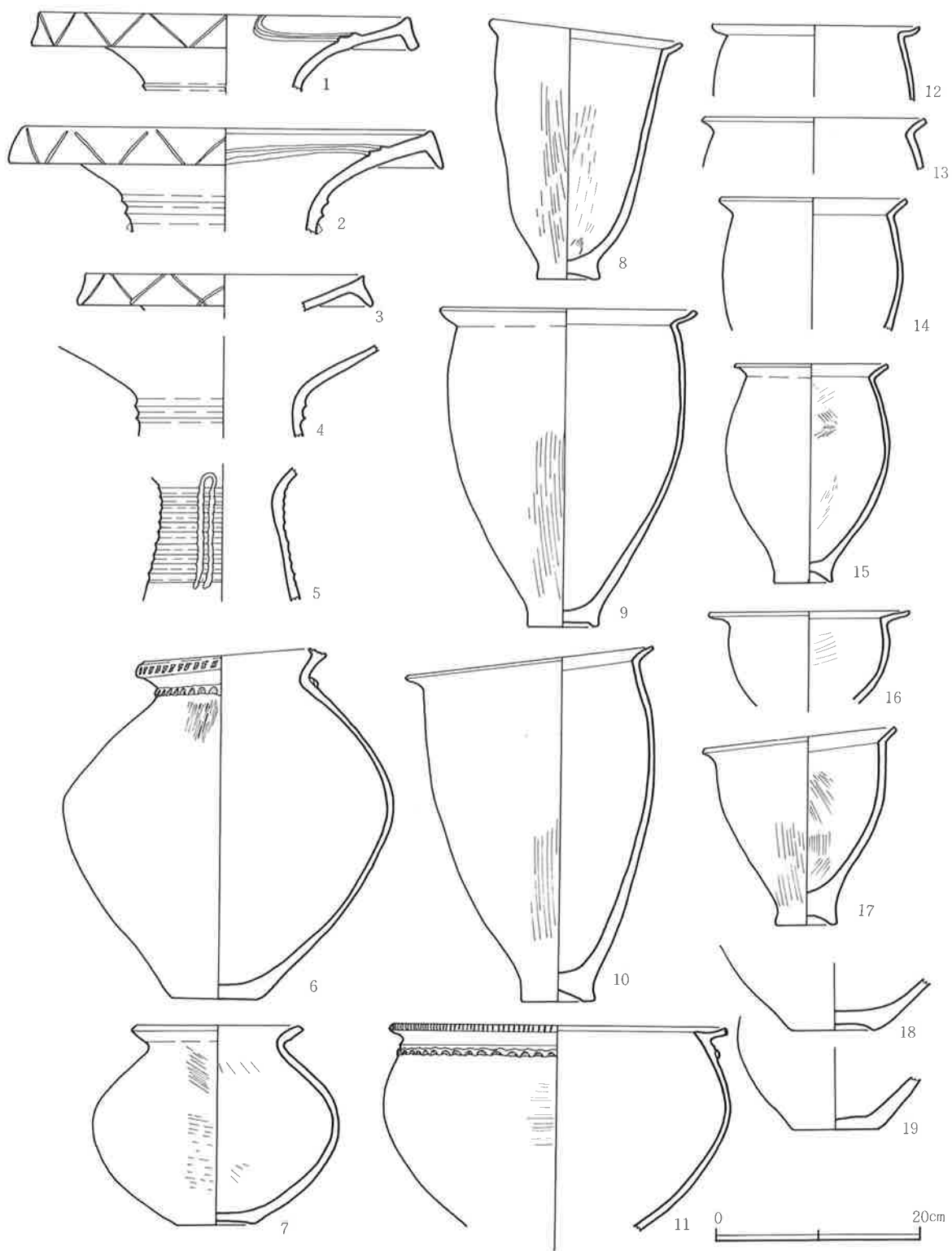
口縁部が大きく外反し稜線を画して下におれ曲がり、その外面にヘラ描きの粗い鋸歯文をめぐらした土器が3個ある(第6図1・2・3)。口縁の上面には中くぼみの突帯文をつけて装飾しているものがある。頸部には断面三角の突帯を1~3条めぐらしたもの(1・2・4)や、10条ばかりの突帯をつけ、さらにその上に紐帯を逆U字状につけているものがある(5)。6は口唇端を上におりまげた形状で、その外面に凹線状のものと刺突文をつけている。頸部には押捺痕をつけた紐帯をめぐらしている。腹部は大きく張り、平底の底部につながる。肩部付近には比較的やわらかい調整具でならした痕が斜め方向につけられているが、内外ともなめらかにならしている。7は短い口縁部がつき、横なで技法のためか口縁外面に肥厚部分があり、複合口縁のようにになっている。腹部はなだらかに張り、粗い刷毛で調整した後、下半部はさらに横方向にヘラで磨研している。内壁には部分的にヘラの削痕がみられ、下半はなめらかにならしている。

甕形土器

口縁部が外反し口縁内面で稜線を画してくびれ胴部につながるもの(10・14・15)や、口縁がやや内彎ぎみになるもの(8・9・12)などがあるが、いずれも口縁は横なで調整され、外壁の下半は縦方向にヘラで磨研している。15はやや小型で胴が若干張る傾向があり、外壁には縦方向の磨研痕がみられるが、内壁の上半には削痕が検出できる。

鉢形土器

11は口縁上面がくぼみぎみとなり、口唇外面に刻み目をつけている。口縁の下には横なでによってできたと思われる稜線がみられ、その下に押捺刻み目をつけた紐帯をめぐらしている。腹



第6図 上層出土の弥生土器実測図

部は大きく張り、外壁は磨研され光沢を保っている。内壁は黒色を呈し、光沢はないがなめらかにならされている。16は小型の鉢で外面は剥落し、内壁には斜め方向の磨研痕が認められる。17は深鉢状の完形品で外壁は縦方向に磨研され、内面は磨研ぎみに押さえてならし、部分的に削痕がついている。

V. 河池遺跡出土の弥生土器

小さな半壊の貯蔵穴から十数個の土器が復元できた。直径149cm、深さ133cmの袋状貯蔵穴で、床面に土器が並べられ、さらにその上に土が入りこみ、その凹みに土器が投げすてられた状態になっていた。貯蔵穴に充填されていた土には有機土分がみられず、くぼみに木の葉が入りこまなかつたことを示唆しており、下層と上層の土器は時間的にもあまり差はなかったと考えられる。このように上・下二層から土器が出土したため、土器の量も多く、しかも完全に復元された土器もかなりあり、貴重な資料となった。

甕形土器は、煮沸用具として使われ、上半分には煤が付着している。新陳代謝がはげしいためか調整方法として刷毛でおおまかにならされていることが多い。しかし河池出土の甕はいずれも器壁が薄く、外壁の下半分は縦方向にへうで磨研され、内壁もきわめてなめらかにならされているところに特色がある。しかも上層と下層の甕にも同様な手法が用いられ、時間差があまりないことを示唆している。なお下層には粗製土器が出土しているが、粗製だから古いというものではなく、むしろ弥生後期や古墳期にこのような手法の土器が作られることが多くなる。

さて、上層の土器の中に第6図1・2・3に示すように、周防独得の形式がみられる。この土器は島田川流域の天王⁽¹⁾や岡山⁽²⁾をはじめとして、東は岩国市の大円寺山⁽³⁾、西は厚東川流域の秋芳町松が迫⁽⁴⁾や宇部市辻・北迫住居跡⁽⁵⁾などから出土している。広島にはこの形式はみられず、松山や大州盆地に若干これに似た形式があるといわれている。しかもこの土器が出土する遺跡はほとんどが高地性集落で、河池遺跡の比高は低いがやはり盆地が一望できる場所に立地している。弥生中期には土器をみても各地で地域性がみられ、とくに畿内では櫛描文をつけた土器が盛行する。広島の中山貝塚⁽⁷⁾などでも前期末にはへう描き沈線が多条化し、中期に入るとそれが櫛描きに移行する。しかし山口県域に入ると櫛描文をつけた土器や破片の発見例はきわめてまれである。この頃九州では須玖式とよぶ無文の土器がつかわれ、この系譜をもつ土器が響灘沿岸を中心に宇部市北迫貝塚⁽⁸⁾などの長門部に伝わり、さらに防府市井上山⁽⁹⁾や片山、小野猪山など佐波川水系に入りこんでくる。結局東西の文化がこの周防独得の形式をもつ集団にはばまれて移入がむつかしかったことが示唆され、近畿から瀬戸内さらに九州と西日本をつなぐ土器編年が究められない要因となっていた。たしかし岩国の大円寺山や島田川流域の遺跡から、櫛描文をつけた土器や破片が若干発見されているが、量も少なく層序的にたしかめられない憾があった。

河池遺跡の下層から第4図1・2・3に示すような櫛描き文をつけた土器が出土した。とくに1は口縁が欠損しているがほぼ完形品として復元でき、焼成もよく東からの持込みの可能性もあり、中山Ⅳ式に比定できる。前述したように上層からは周防独得の形式が出土しており、ひとつの貯蔵穴からふたつの形式の土器が出土したところに大きな価値がある。上層と下層には若干の時間差を考えなければならないが、周防独得の形式と中山Ⅳ式はほぼ同じ時期に比定できる。

なお奇しくも河池遺跡を発掘した同じ年の夏、防府市井上山遺跡⁽¹⁰⁾の発掘調査をしたが、同じ包含層の中から周防独得の形式と、九州に系譜をもつ須玖Ⅱ式に比定される鋤先形口縁がかなりの量出土した(第7図)。この結果、畿内Ⅲ≒中山Ⅳ≒周防独得の形式≒須玖Ⅱと、西日本全域にまたがる土器編年のきめ手をもつけることができたのは、大きな収穫であった。一応弥生中期後半のものと比定できるが、今後さらにきめこまやかな研究を重ねていかなければならない。

河池遺跡には、崖面にも竖穴が露出しており、丘陵上に土器の散布もみられるところから、まだかなりの遺構が埋蔵されている可能性があり、前述のような学術的に貴重な資料の追加を期して、今後さらに調査が望まれる。

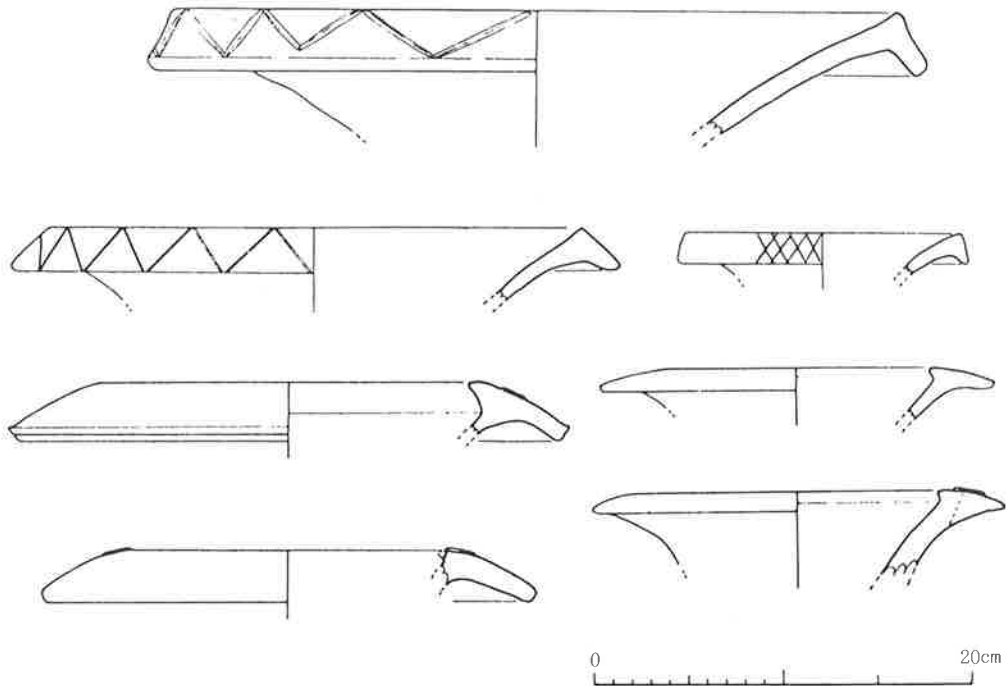
注) (1), (2)「島田川」周防島田川流域の遺跡調査研究報告 1950-1953 山口大学島田川遺跡学術調査団, 小野忠熙氏によるたぐさんの報告や論文がある。(3)山本一朗「大円寺山遺跡」(4)「松が迫遺跡」山口県教育委員会 この発掘調査以前の採集品にもいい資料がある。(5)「宇部の遺跡」宇部市教育委員会 (6)小野忠熙編「高地性集落跡の研究」資料編, 学生社, 弥生系高地性集落総合研究のためとくに西日本の弥生式土器について数回の会合で検討された。

(7)「広島市中山貝塚」日本考古学年報, 11

(8)前掲書「宇部の遺跡」

(9)「右田一丁田遺跡他」山口県教育委員会 1973

(10)「井上山」井上山遺跡発掘調査団 1979



第7図 防府市井上山遺跡出土の弥生土器(井上山より転載)

VI. ま と め

1. 河池遺跡は山口県玖珂郡周東町大字久原字河池に所在する弥生時代中期後半の袋状貯蔵穴からなる遺跡である。
2. 周東町教育委員会は町史編纂の途次で、この遺跡もその内容に加えたいと念願し、緊急発掘調査を実施したものである。
3. 袋状貯蔵穴は農道掘削中の山の斜面で発見されたものである。長径約150cm、深さ約130cmと比較的大型で、内部に多量の土器が包蔵されていた。
4. 土器は上・下層に分かれ出土している。床面には貯蔵穴が廃棄される寸前の土器が、その上に土が流れ込み、さらに土器が投棄されている状況がとらえられた。
5. 出土した土器は十数個に復元され、土器の形状と出土状況から次のような事実が判明した。すなわち、畿内Ⅲ形式 ≒ 中山Ⅳ形式 ≒ 周防独得の形式 ≒ 須玖Ⅱ形式の、西日本にまたがる弥生中期後半の土器のめやすを求めることができた。



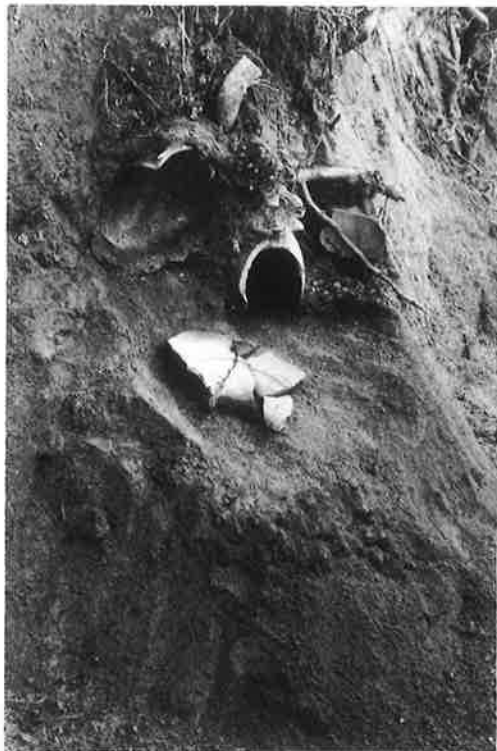
遺跡の遠景（西から）



遺跡の近景（西から）



調査前の状況



上層の弥生土器出土状況



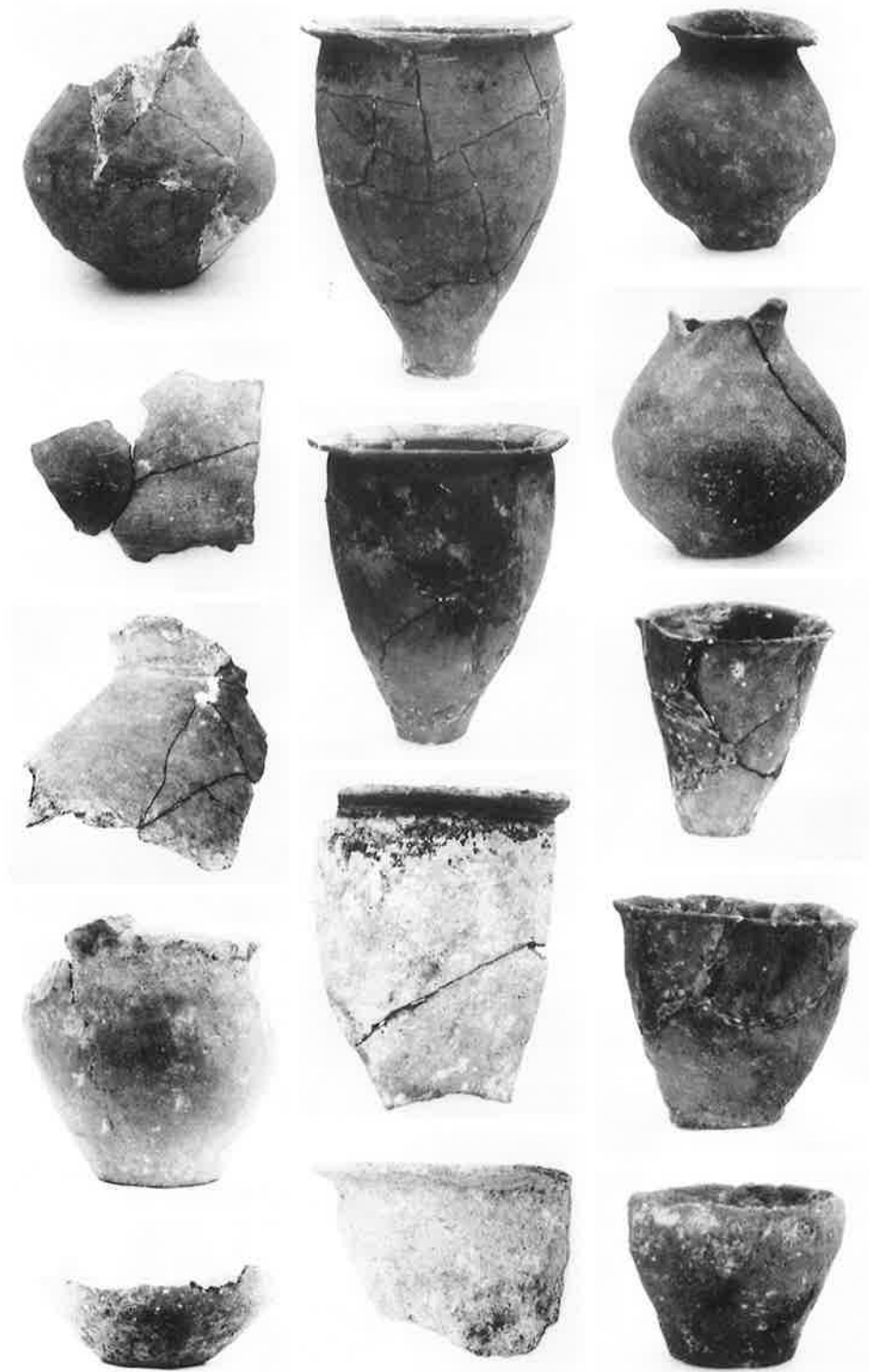
上・下層の弥生土器出土状況



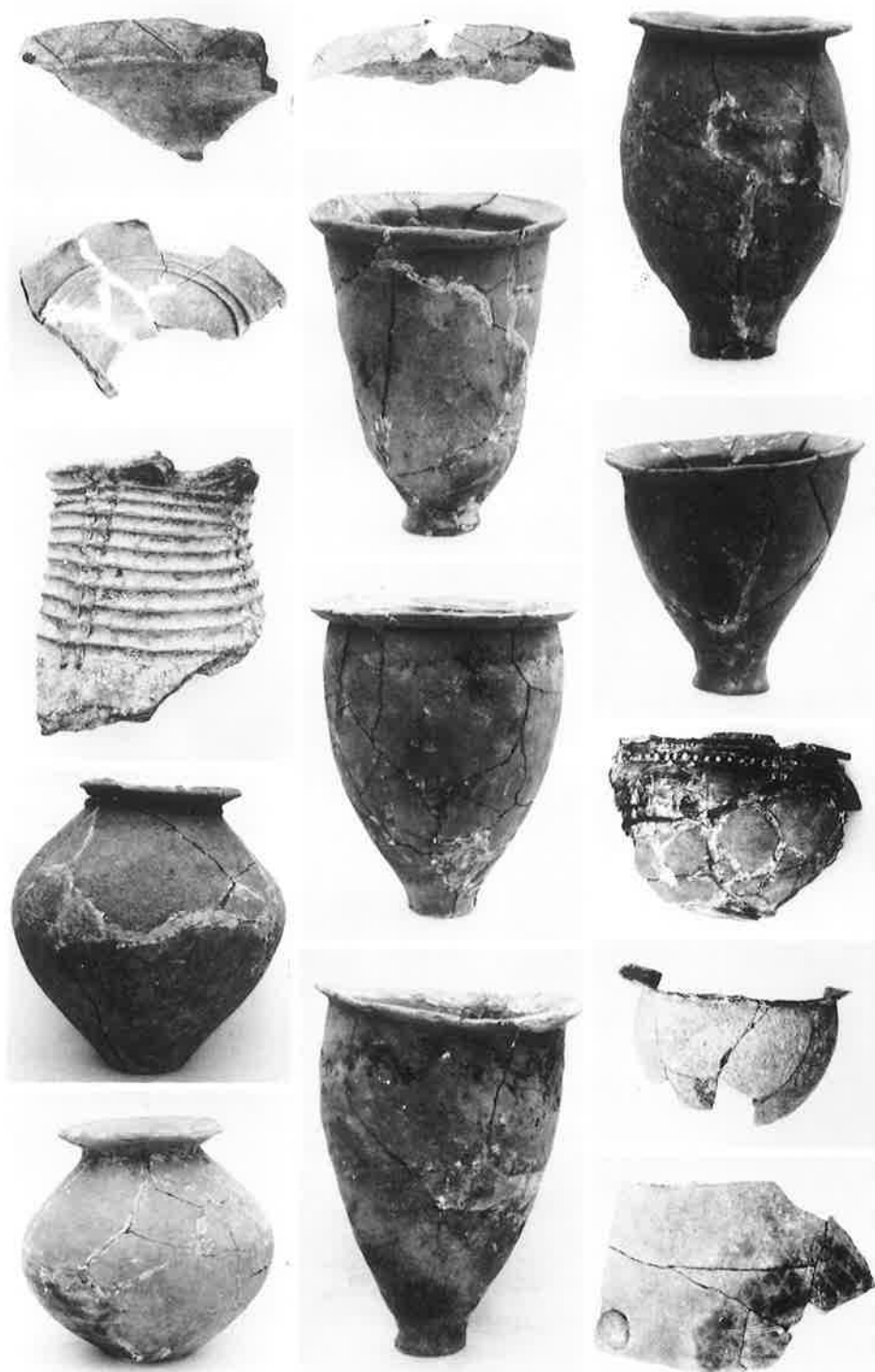
床面付着（下層）の弥生土器



完掘後の貯蔵穴



下層出土の弥生土器



上層出土の弥生土器（右下 下層出土）